

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2021 No.32

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

されどオンライン… 1 入学準備学習プログラム… 2 Web キャンパス学習 学科プログラム… 4 戻ってきた学生の様子… 5
新任学習アドバイザー 挨拶… 6 LSC 資料紹介… 7 <学び★サプリ>上達のコツ・大学教育学会 第43回大会 参加報告… 8

されどオンライン

○ 学習支援センター長 森河 亮

2021年2月中旬から3月中旬における広島県の新型コロナウイルス新規感染者数は、一桁を維持していました。3月下旬から4月上旬にかけて同数が10名を超える日もありましたが、授業が始まる4月5日の同数は9名、次の4月6日は3名と、大きな心配をすることもなく順調に対面授業を実施していました。同時期の都市部の連日数百名の新型コロナウイルス新規感染者数の発表を、どこか対岸の火事のように眺めていたのを覚えています。

学習支援センターが担う修大基礎講座の授業では、ワークを多用して自ら手を動かすことを履修生に求め、また発問を多く設定して学生が自ら考え、加えて他者との交流の機会を多く設け多角的な気づきがあるよう授業設計をしています。ただ、今年度の授業では、感染症対策の観点から、「他者との交流の機会を多く設ける」ことはできませんでした。できたとしても、自分が書いた考えを見せ合ったり、一言二言考えを隣に伝えたり、という程度でした。それでも、修大基礎講座のすべての授業回をオンラインで行った昨年度とは異なり、「学生の反応が目の前で把握できること」が叶い、大きな喜びを感じながら授業を実施していました。

5月になり、広島県に緊急事態宣言が発出され、本学も原則、非対面型授業実施に舵を切り、修大基礎講座もオンデマンド授業となりました。学生の反応を把握できなくなりました。大急ぎで授業動画を作成し、オンライン授業の準備を整え、この原稿を書いている5月25日現在、残りの授業がMoodle上で進んでいます。

遠隔だから失うものもあれば、遠隔だから得られるものもあるでしょう。修大基礎講座でいえば、初回から4回までの対面授業では1度も出席していなかった学生が、オンライン授業になってはじめて授業に参加している

ことが確認できました。対人的な問題や精神的な問題で配慮を必要とする学生にとっては、履修しやすい形態なのかもしれません。また、濃厚接触者として自宅待機となった、病気やけがを負った、など何らかの理由で入構できない学生、他にも天候不良などで休講が予想されるような場合でも登校する必要がなく、オンライン授業であれば問題なく受講できます。

昨年度、本学が独自に行った学生へのオンライン授業に関するアンケート結果を見ると、様々なデメリットを挙げている一方で、「時間の有効利用」と「交通費の節約」に大きなメリットを感じているようでした。時間の有効利用に関しては、登下校の時間が不要となるため、その時間を授業外学習や不足気味であった睡眠時間に充てている様子がうかがえました。学生の中には、往復で約3時間を登下校に要する者もいるため、日々の生活のなかでの積み重ねを考えると大きな時間になったことと思います。

もう一つの交通費の節約に関しては、その理由の推察は想像に難くないでしょう。学習支援センターとしてこのメリットを最も感じたプログラムは、入学準備学習の「キャンパス学習」でした。これは10月～11月の早期合格者に対して実施するプログラムで、例年であれば12月と3月に本学キャンパスに入学予定者を集めて行います。入学予定者同士の交流を一つの目的としており、オンラインではそれは十分にはかきませんが、遠く関東・関西・沖縄などから参加する入学予定者にとっては、経済的な負担をかけることなく実施できました。

長い間、学生とじかに顔を合わせて仕事をしてきたため、「オンラインだからこれができない・あれは諦めないと」と考えがちでしたが、これからは「オンラインだからこれができる・あれは見直さないと」と考え、対面・非対面のメリット・デメリットを天秤にかけながら、その場その場に応じた最適解を導き出していきたいと思っています。

入学準備学習プログラム

— コロナ禍におけるWebキャンパス学習の試み —

学習支援センターでは、早期合格者を対象とした入学準備学習プログラムを実施しています。2020年度は新型コロナウイルス拡大防止のため、例年とは異なる対応を求められました。今回はキャンパス学習にスポットを当て、コロナ禍においてのその試みを紹介します。

● 入学準備学習プログラムの概要

本学では、総合型選抜・学校推薦型選抜（公募（専願）・指定校・附属校（専願））の約600名の早期合格者を対象に、入学準備学習プログラムを全学的に実施しています。これは、「合格決定後の学習習慣の継続」や、「大学での学びに必要な知識の補充」、「大学生活への移行に伴う不安の軽減」を狙った高大接続プログラムです。このプログラムは、①大学で模擬講義などを体験する「キャンパス学習」と、②ワークブックなどの紙面で行う「通信課題学習」の2つで構成されています。各学科・専攻と学習支援センターが連携しながら、実施しています。

● キャンパス学習とは

来学し、講義を受けるプログラムを提供しています。例年、12月と3月の2回実施し、キャンパスにおける模擬講義などを通じて、「大学生」を体験します。学科提供の講義と、学習支援センター提供の講義が組み合わさった、丸一日を使った学習です。大学に慣れる、また、入学してからの自分をイメージする機会となります。

● 2020年度のキャンパス学習の試み

2020年度は、コロナ禍にあり、例年通りの対面形式のキャンパス学習実施を諦めざるを得ない状況となりました。しかし、この機会自体をなくしてしまうと、早期合格者の学びを止めてしまうと考え、中止ではなく、非対面形式での実施を決めました。以下、入学準備学習プログラム初の非対面形式によるキャンパス学習実施の試みを報告します。

まず、非対面形式で同時双方向型とオンデマンド型のどちらを採用かは、各学科・専攻で決めました。高校生は、「Web キャンパス学習 Week」期間内に指定されたプログラムを受講します。実施方法やプログラムは、各学科・専攻によって様々でしたが、受講しやすさを第一にして、郵送物や実施形式をよくよく検討しました。

▶ Web キャンパス学習 — 学科プログラム

各学科・専攻の入学準備学習プログラム実施委員が中心となって、プログラムを提供しました。

非対面形式での実施には、同時双方向の場合に特に入念な「仕込み」が必要でした。対面ではその場で何とかすることも、非対面では対応困難になるためです。例えば、場に臨むこと一つをとっても、対面であれば、教室に行けば完了となりますが、非対面ではそうはいきません。インター

ネット接続環境や、介する会議システムは高校生でも操作可能なものなのか、事前連絡の内容はどうするかなど、様々な角度から検討していきました。

さらに、対面形式で得られていた効果を非対面形式でも享受できるよう、実施方法の工夫が必要となりました。具体的には、Zoom を介した場合は、ブレイクアウトルームを用いてグループ活動を行ったり、スタンプによって相手に自分の状態を伝えるなどです。これにより、本来のキャンパス学習でも行う、高校生同士の交流で横のつながりを作る機会を設けていました。

さらに、非対面のプログラムの準備の中で、教員も職員も双方、実施方法について勉強し、情報交換しながら、教職協働でプログラムを作ることができました。それぞれの立場からの検討、擦り合わせの中で、徐々に良いプログラムへとブラッシュアップしていったように思います。

▶ Web キャンパス学習 — 学習支援センタープログラム

多くのアクセスを可能にするため、オンデマンド型を採用しました。これにより、キャンパス学習の12学科同時開講による人手不足から開放され、提供プログラムの充実を図ることができました。新しいコンテンツ作成に時間を充て、大学生に必要な「読む」「聞く」「書く」「話す」の四技能を網羅した、4つの講義をそろえました。

さらに、「広島修道大学の学生になる」という意識づけとなる動画の作成にも手を付けられました。対面だと高校生が聞きにくそうな、ちょっとした質問に対する回答動画です。このフィードバックによって、大学生活に対する不安解消や期待感に 대응することができたのではないかと考えます。非対面だと、一方通行になりがちですが、高校生の声を拾い上げ、大学とのつながりが感じられるものを作ることができたと思います。

以上の2020年度の試みにより、非対面移行に負けない、質の高い、Web キャンパス学習になったと考えます。入学前の時間を有意義なものにする一助となったと自負しています。知識だけではない、実感を伴った大学への適応に繋がったのではないのでしょうか。（宮原）

● Web キャンパス学習の実現に向けて

遠隔でのキャンパス学習は初めての試みであり、実際に高校生に対して遠隔でのプログラム実施が可能であるのかを一つずつ検証しながらの試行錯誤の連続でした。

まず、各学科の実施委員に遠隔ツール（Zoom や Google Meet 等）の選択、実施方法（同時双方向型・オンデマンド型）の選択をしていただき、プログラム作成に向けて作業をお願いしました。高校生には本学のアカウントを付与できなかったため、最終的にはすべて Zoom を利用することとなりましたが、同時双方向型とオンデマンド型、あるいはオンデマンド型のみというように学科によって異なる形式のプログラムとなり、それぞれの特色が表れた形となりました。学習支援センター員も教員もそれぞれ知識や経験に違いがあり、双方が試行錯誤しながら連携協力して実施にこぎつけることができたことは貴重な経験となりました。

遠隔実施に向けて一番気がかりだったのは、参加する高校生の通信環境の問題でした。高校生の PC やタブレット、スマホの保有率が不明だったこともあり、通信環境が整わない為にキャンパス学習に参加できないということがないようその場合は事前に連絡するよう伝え、希望すれば学習支援センターのまなびラボで受講できるよう準備を整えましたが、最終的には、まなびラボで受講した学生は1名のみでした。

次の問題点は、プログラムの URL の周知方法でした。当初は、E メールでのお知らせを考えていましたが、把握できた E メールアドレスが本人のものか家族のものが不明であったこと、確実に受信される保証がないことから、最終的には紙に URL と QR コードを印刷し、郵送することになりました。また、高校生の Zoom の認知度も不明だったことから、初めての高校生にもわかりやすいように『Zoom の使い方マニュアル』を作成し、プログラム URL とともに郵送しました。

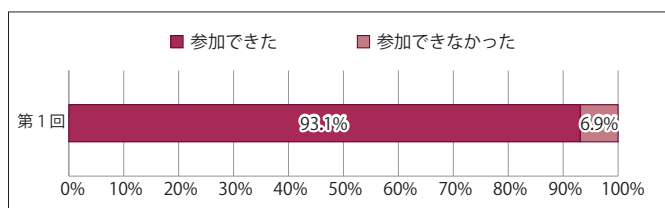
当日は、同時双方向型プログラムのトラブル対応として、センター職員も学科のプログラムに参加し状況を把握していたため、Zoom に入室できなかったり、途中で通信回線が途切れたりという急なトラブルにも何とか対応することができました。

いくつかの問題をクリアし、何とか実現した初の Web キャンパス学習でしたが、実際に参加した高校生はどのように感じたのか、アンケートの結果をご覧ください。（冨永）

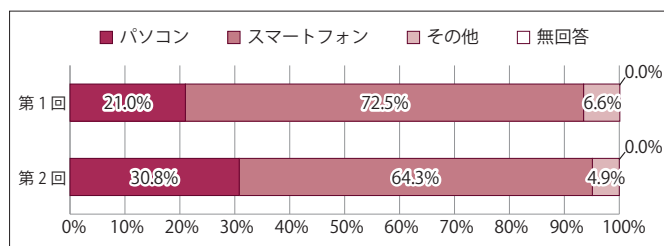
● アンケート結果について

アンケートはオンラインで実施し、第1回71.4%、第2回89.4%の回答率でした。

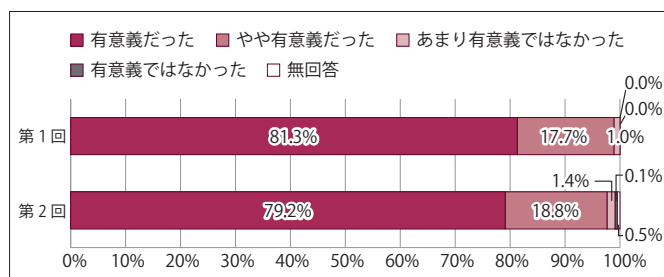
①同時双方向型プログラムに参加できましたか？（第1回のみ）



②プログラムに参加する際に使用した機器は何ですか？



③ Web キャンパス学習のプログラムについて



①の「参加できなかった」には、同時双方向型プログラムの当日に高校の授業や行事があった等を含んでいます。通信環境が原因で参加できなかったというのは、453名中5名（1.1%）でした。当日、電話連絡があったものは参加できるまで対応を続けたので、「参加できなかった」を選んだケースでは諦めて連絡をしなかったものと思われます。

②は第1回、第2回ともスマートフォンを使用したという回答が圧倒的でした。その他はタブレット、iPad という回答でした。

また、グラフはありませんが、Wi-Fiを利用したかどうかを尋ねたところ、93%が利用したと答えています。殆どの参加者が自宅から参加したものと思われるので、9割以上の家庭でWi-Fi環境は整っているようです。

③では Web キャンパス学習の全プログラムについて有意義と感じたかどうかを評価してもらい、各回の総合計で割合を算出しました。

「有意義だった、やや有意義だった」と肯定的なのは第1回で99%、第2回で98%となりました。これは2回とも対面で実施した2019年度入学予定者のためのキャンパス学習の評価とほぼ同じで、第2回だけに注目すると「有意義だった」は6%以上上昇しています。これは教職員や学生スタッフの工夫や協力が一つの成果として表れたものと言えるのではないのでしょうか。

最後にキャンパス学習に対する感想をご紹介します。

「オンデマンドは、何度でも見られるので良かった」「空いている時間に家で気軽に学習できた」「大学生になるという実感が沸いた」「自分も交流した上級生のようになりたかった」など、慣れない環境の中でも、心強い感想が多く見られました。

とは言うものの、「やはり対面でやりたかった」「キャンパスに行きたかった」という意見も多数あったことを最後に付け加えておきたいと思います。（津原）

Webキャンパス学習 学科プログラム

オンライン「同時双方向」 交流の実現に向けて!

商学部 新本 寛之

昨年度の「キャンパス学習」は全学的に Web 実施となりました。商学部は、4月から大学生活を共に歩む高校生間ならびに現役商学部生との交流を可能な限りリアルタイムで実現したいという思いから、初の試みとなるオンライン「同時双方向」プログラムを導入しました。

その主旨のもと企画したのが、Zoom を活用した「自己紹介タイム」と「ゼミナール体験」です。例年、商学部は学生主導のプログラムを採用しています。学生にとっても入学準備学習の目的にそって主体的に取り組むことは、授業では得られない教育的効果があると考えます。このたびも学年を超えた商学部生20名が準備段階から取り組み、当日の進行も学生によって進められました。

学生たちが準備段階で最も検討を重ねたのは、本人たちも不慣れな Zoom を活用した展開でした。当日、いかにスムーズに Zoom に参加してもらうか、およびオンライン上で沈黙させないグループワークの実現が大きな課題でした。

前者については、高校生に事前連絡の上、プログラム開始1時間前から Zoom への入室を促しました。学生は入室する高校生一人一人に画面越しに笑顔で声をかけ、双方向の要となるマイクの操作方法について確認。学生たちの柔軟な対応と和やかな雰囲気づくりにより参加高校生137名全員トラブルなくスタートすることができました。学生の対応力と高校生たちの協力に感謝するところです。

プログラムの核となる後者については、グループワークに必要なブレイクアウトルーム25室への振り分け手順の徹底、ファシリテーター＝学生の役割共有、自己紹介シートの事前記入依頼、トラブルを想定したプラン B 作成等々、学生たちは二重三重の対策準備のもと当日を迎えました。実際、進行学生の音声途切れ等のトラブルに見舞われましたが、学生たちは慌てずプラン B で対応しておりました。学生たちのふりかえりによると、このたびの経験からリスク管理の重要性を学んだとのコメントが複数寄せられました。

一方、高校生からは「不安がある中、先輩方や同級生と交流できて有意義」「自分も先輩みたいになりたい」「トラブルにもすぐに対応できて素晴らしい」「グループ学習では(中略)話が進まなかった」等、学生にとって励みならびに課題材料となる有益な感想を得ました。課題については、学生の発想力に期待しつつ改善を図る考えです。

次回の「キャンパス学習」が対面あるいは Web 実施いずれになろうとも、引き続き商学部生の主体性発揮の場としながら、高校と大学とのスムーズな接続という目的達成に向けて、より効果的な商学部らしいプログラム提供を目指します。

国際コミュニティ学部 プログラム実施について

国際コミュニティ学部 木原 一郎

昨年度入学準備学習プログラムのオンラインでの実施に際し、担当者として心がけたのは、例年のプログラムをオンライン上で再現することでした。

というのも、各学部そうであると思いますが、例年対面で行われている国際コミュニティ学部のプログラムは教職員・在学生の愛情が注がれたものになっています。プログラム構成は、学習支援センターが用意してくださった授業を効果的に織り交ぜながら、学部オリジナル授業中心につくられています。そしてプログラム当日は多くの在学生が協力してくれます。在学生自身が学生生活や学びについて話す場面もあります。それに加え昼休みは入学予定者・教員・在学生と一緒に昼食を摂るため、貴重な交流の場となっています。その愛情が伝わったためか、このプログラムを経験し入学した学生は、入学後も積極的に学部行事等に関わってくれたり、学習面でも周りを引っ張っていきやすいように感じます。そのため入学予定者に例年同様のプログラム構成や効果を届けることを目指しました。

プログラム構成自体は、例年のように再現できました。またオンデマンド型授業と同時双方向型授業を組み合わせ、入学予定者の受講負担を軽減できたと思います。同時双方向型授業の当日は例年通り在学生が協力してくれて、学生生活について語る時間も設けることができました。ご協力いただいた先生方、在学生、職員さんのおかげです。

しかし同時双方向型授業当日の運営に関してはトラブルがありました。特に機材操作担当が両学科で私ひとりの状態で、両学科同時にプログラムを進めたことにより、トラブルへの対処が遅れた、授業進行が散漫になったなどがありました。これは担当の私の能力の無さと準備不足のせいです。自覚し反省しております。最もうまくいかなかったのが、交流の場の再現です。昼休みの Zoom ランチなどいくつか交流の場は作りましたが、入学予定者にとってはハードルが高かったようです。プログラム検討時にネット上での交流に慣れている世代であるという思い込みもありました。もっと丁寧に導入部分を考えるべきだったと思います。入学予定者の不安をぬぐい去るまではできませんでした。そのようにトラブルだらけでしたが、受講した入学予定者にとっては大学生活の模擬体験にはなったと思います。入学後にオンライン授業を受ける際の準備や授業に臨む姿勢などに少しでも良い効果が出ていることを願います。

全体を振り返ると、学習効果としては本学部らしいプログラムにできませんでした。オンライン上では例年の再現ではなく、プログラム全体の目的と狙う効果を改めて検討すべきだったように思います。今年度は対面であってもオンラインであっても、本学部らしいプログラムにできればと思います。

戻ってきた 学生の様子 — まなびコモンズを中心に —

学習アドバイザー 宮原 千咲

2020年度は新型コロナウイルス感染予防のため、学習支援センターでは利用を制限したり、実施形態を変更したりするなどして学習支援を行いました。幸いなことに、2021年度前期は対面で開始でき、5月上旬までは「通常」のサービスを提供することができました。以下、2020年度前期と2021年度前期の学生の利用状況を比較し、現場で対応する立場から学生の様子について述べていきます。

2020年度前期の利用状況

2020年度前期は、コロナにより、対面形式での様々な対応ができないう状態が始まりました。大学の危機レベルが上がり、入構制限もかかったため、学生は理由なくキャンパスにいたることができませんでした。学習支援センターもこれに準じた対応をしました。

2020年度前期の学習支援センターは、学生がいない状態からのスタートでした。まなびコモンズを閉じ、ワークショップや学習相談などの学習支援は、非対面での準備が整うまで実施を見送りました。

対面でのワークショップを非対面で行うようにしましたが、参加者数は例年より少なくなりました（表1）。この減少は、学生同士が誘い合い、連れ立って参加することができなかったためと推測します。

【表1 年度別 5月上旬までの6回分ワークショップ参加者合計数】

年 度	2019	2020	2021
参加者数	210	58	132

また、学習相談件数も非常に少なく、これは遠隔での学習相談の準備が追いつかなかったことが原因に挙げられます。さらには、遠隔相談の周知が至らなかったことも、相談件数が少ない理由として挙げられるでしょう。学生からは「どこから情報をとればいいのかわからなかった」「情報がいろんなところからどんどん来るので、流れていく」という声も聞きました。その他の原因として、そもそも「相談」というものの自体が人や場を選ぶものであり、特に、まなびコモンズが開かれていなかったために様子がわからず、相談のハードルがより高くなったことも原因に挙げられるでしょう。

【表2 年度別 5月上旬までの学習相談件数】

年 度	2019	2020	2021
相談件数	163	10	134

2021年度前期の利用状況

2021年度前期は、対面可能な状況でスタートし、5月上旬に非対面へと移行しました。

まず、ワークショップの参加についてですが、2020年度

と比較すると、参加者は通常の状態に戻ってきたと言えます（表1）。開催が5限目であるにもかかわらず、比較的多くの参加がありました。「授業は3限目までだったけど」、「レポートはまだ課されていないけど」参加したという学ぶ意欲の高い学生が多い印象でした。また、申し込みの際には、学習支援センターに連れ立って来る1年生も多く、1人で受講するのは勇気がいるようです。2020年度はこれができず、参加者数減となったと改めて感じます。

つぎに、学習相談について述べると、2021年度は件数が戻っていました（表2）。学習相談記録から、利用したことがある学生の友人への勧めが、数に大きく貢献していたことがわかります。

また、遠隔での学習相談利用者は複数回利用しており、一度きりで終わる利用者は少数でした。これは、内容的に継続的な相談が必要だったということももちろんありますが、人に話したいという学生の気持ちからきているのではないかと考えます。

さらに、まなびコモンズが使用可能な時期は、個人学習ゾーンでもグループ学習ゾーンでも、一定数利用されコモンズの席が埋まることも少なくありませんでした。授業前や空きコマを過ごすのに、ちょうどいい場所のようです。

利用者の様子からの所感

前述の通り、2021年度はまなびコモンズの利用が多く、気軽に居られる場所を学生が求めて来ているように感じました。複数人で利用していいか質問されることもあり、友人と滞在できる場所を探しているようでした。学内では、以前、複数人で利用することができていた空間で椅子が撤去されたり、空間自体が閉鎖されていたりと、学生が気軽に滞在できる場所が少なくなっています。学生は居場所をなくし、まなびコモンズに流れて来ているのでしょう。

この「居場所」というのは非常に重要だと考えます。物理的な意味合いだけではなく、心理的な「居場所」は、大学への適応に関係します。初年次教育においては、居場所、帰属意識の形成が退学防止のカギとなることは話題に上ります。「居場所」は物理的な場を指すのではなく、人と出来事を伴うものだと考えられます。私は、学習支援センターは、学びという出来事を通し、人と繋がる場でありたいと思います。「居場所」があれば、学生は安心感のある学生生活が送れるでしょう。

学習支援センターは、開いていることが重要です。まなびコモンズなどは開いていれば、自然と人が行き交う「場」になります。今までは学生は自然に形成できた関係も、コロナ禍では自身で求めて動かなければ繋がりがなくなっていきます。学習の場というだけでなく、学生と学生、学生とアドバイザーなど、人が繋がる「居場所」でありたいです。

新任学習アドバイザー 挨拶



学習アドバイザー 斎藤 佳子

2021年4月に、学習支援センターに学習アドバイザーとして着任いたしました。これまでは、大学等で非常勤講師をしていました。私が専門とする日本近代文学に関する講義や、初年次教育として作文指導やリーディングの授業

を担当していました。

どの授業も、回を重ねるごとに、学生たちが考えを深めたり、書く技術を高めたりし、成長していく様を間近で見ることは面白く、やりがいのあるものでした。しかし、講師という立場では、学生の成長を知ることができるのは、学生が自身の疑問や考えを授業コメントなどで言語化してくれる場合に限られていたように思います。学生の感じたことや疑問に応えられる授業をし、成長をサポートしたいと思っていましたが、言語化の前段階で躓いてしまった学生に対しては、うまく働きかけることができなかったような気がします。学習支援の公募を見つけたとき、今までとは異なった方法でより深く学生の成長に接し、学ぶ機会だと考え、今に至ります。

学習支援の場に身を置くのは初めてなので、これまで私が研究などで培ってきた経験をどのように活かすことができるのか、戸惑うことも多々あります。ですが、私自身のこれまでの学生生活や研究生生活を振り返りつつ考えてみたところ、次のようなことに気づきました。

それは、学問を通じた人間関係の重要性です。学生の頃、論文のいろはもわかっていなかった私に、先生や先輩方が、問いの立て方など、論文を書く上で必要なスタディスキルを教えてくださいました。特に、先輩方との関係は密なもので、学問の面白さを教えていただいたり、先生には言いにくい疑問や悩みを聞いていただいたりしたことは、学問の道を進む大きな支えでした。大学といえども、学びを支えてくれる人間関係に出会う機会は稀有なものです。もしかすると、学習支援におけるアドバイザーという存在には、この先輩と後輩のような、学びを通じた人間関係の構築が求められているのかもしれない。

学習支援センターでは、スタディスキルを教えるだけでなく、学生たちが、私たちアドバイザーや、他の学生たちと学びを通じた人間関係を築く場——つまり協創の場を提供できればと思います。まだまだ未熟ですが、学生が大学生活や学問の意義や面白さを見出せるようサポートし、また、私も共に学んでいきたいと思っています。



学習アドバイザー 谷岡 亮

2021年4月に、学習支援センターに英語の学習アドバイザーとして着任しました。

広島修道大学に来る前は東京の大学や予備校で講師や職員の立場から英語教育にかかわる仕事をしていました。大学ではライティン

グ、リーディング、リスニング、ビジネス英語といったクラスを担当し、予備校では帰国生の受験に必要な TOEFL iBT や IELTS、英検などの資格試験の指導を行っていました。

英語を学ぶきっかけは小学校の頃からサッカーをしていた、その影響もあり海外の文化や音楽にも興味を持ちました。中でも大きなきっかけとなったのは中学校の時に国際交流の一環でニュージーランドの田舎町にサッカーの試合をするために行った時のことです。相手チームや地元の人が町で話かけてくれるなど、多くの人がとても親切にしてくれました。ところが自分はそういった人たちに対して、英語力がないためきちんとコミュニケーションが取れず、とてももどかしい思いをしました。それから自分の言葉で海外の人とコミュニケーションを取りたいと思うようになり、英語をきちんと勉強するようになりました。

新型コロナウイルスの影響で、学生も以前までとは異なる学び方が求められ、苦勞することも多いかと思います。しかし、今の状況をネガティブにとらえ後ろ向きになってしまってもプラスに働くことはとても少ないです。こういった難しい社会情勢の中ですが、自ら主体的に学んでいくことで自身を大きく成長させることができると思います。私自身も大学生の時は自分で判断をすることの難しさを痛感しながら学生生活を送りましたが、交換留学や資格試験の勉強など積極的に行ったことが自身の成長につながったと思っています。

学習支援センターには定期的に行われ TOEIC やレポートの書き方等を学ぶ「ワークショップ」、毎週短い時間で細かく学習を進める「スタディグループ」、そして個別で行われる「学習相談」の3種類の学習サポートの形があり、自分に合った方法で学びを進めていくことが可能です。英語が苦手なので学び直したい、TOEIC で良いスコアを取りたいなど、なんでもご相談ください。語学学習は無理せず継続的に学習を続けていくのが理想的ですので、みなさんと楽しく継続的に英語を学ぶ環境を作っていきたいと思っています。英語学習に関心のある方はお気軽に協創館1階にお立ち寄りください。

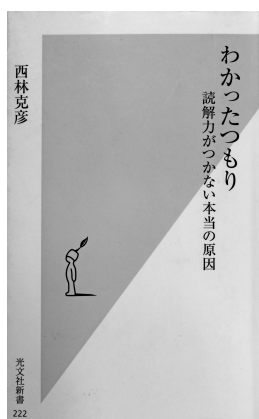
LSC資料紹介

学習アドバイザー 齋藤 佳子

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

『わかったつもり 読解力がつかない本当の原因』

西林 克彦(2005)／光文社



読 むとは私たちにとって非常に身近な行為です。私たちは毎日、何かしらの文章を読んでいます。ですが、ひとたび自分は正確に読めているのかということに意識的になると、読むということはなかなか難しいものです。読める／読めない場合の違いは、どこにあるのでしょうか。

本書は、「文章をよりよく読むためにはどうすればよいのか」を述べた新書です。焦点をあてているのは、文章を一読して「わかった」と思っているものの、実際には不十分な理解であったり、間違った理解をしていたりするという「わかったつもり」の状態と、その脱却方法です。本書は、認知心理学などの研究結果や、筆者が実際に大学生に小学校の教科書のテキストを読ませた際の事例を取り上げ、「わかったつもり」がより深い読みの障害になっていることを指摘しています。そして、「わかったつもり」の脱出法を提示し、読むことについての考察をしています。

本 書が一番の主張は、文章をより深く理解して読むために障害になっているのは、文章が「わからない」ことではなく、「わかったつもり」になることだということです。「わからない」場合は、そのわからなさを手掛かりに、「わかった」といえる状態にまで近づいていくことができます。しかし、「わかったつもり」に陥っている場合、自分では「わからない」と思う箇所はなく、満足している状態にいたため、適切な理解へと近づく手掛かりがなく、「わかった」状態に到達することが困難になってしまうのです。

筆者は、「わかったつもり」から抜け出すには、あえて「わかった」と感じている状態を崩す必要があると述べます。「わかった」と感じている状態から、「わからない」状態へ自分を持っていくことで、その「わからない」

事柄を手掛かりに、より深く「わかった」状態を目指すことができるようになるのです。

本書の構成は以下の通りです。

第一章では、より深い読みが可能なテキストであるにもかかわらず、不十分な読みで留まったために「わかったつもり」になってしまうという例を挙げながら、「わかったつもり」が深い読みを妨げていることを指摘します。

第二章では、読む上での文脈の働きについて述べられています。文章の背景となる文脈がわかることにより、読み手は、スキーマ（「あることがらに関する（略）ひとまとまりの知識」）を活性化させ、文脈から得た情報と合わせて、文章から意味を引き出し理解します。文章に含まれる文脈はいくつもあり、文脈が異なれば、異なる意味が引き出されます。どのような文脈でも良いというわけではなく、文章の部分間に関連がつくような意味が引き出せる文脈を用いる必要があります。

第三章では、不適切な文脈を用いてしまったために、誤読し、「わかったつもり」に陥るという事例を挙げています。

第四章では読み手が「わかったつもり」に陥るのは、読み手が大雑把に全体の流れに沿うような文脈をあらかじめ想定し、読み飛ばしなどを行っていることが原因だと述べられています。また、文脈だけでなく、読み手が持つ常識や道徳のスキーマを当てはめることによって「わかったつもり」がおこることが指摘されています。

第五章では「わかったつもり」を脱却し、より「わかった」状態を探っていくための思考と対策について述べられ、さらに、解釈の自由と制約、大学入試センター試験や国語教育にまで射程を広げ、読むという行為をどのように考えるかが提示されています。

読 者に語りかけるようなやさしい敬体で書かれた本書は、読むことに困難を感じている学生に勧めることはもちろん、彼らがどのように躰くのかを理解する上でも示唆的な一冊となるのではないのでしょうか。

<学び★サブリ>

2021 Vol.20

上達のコツ

学習アドバイザー 谷岡 亮

多くの人が日々何かを学んだり、また趣味として取り組んでいるかと思いますが、なかなか上達せず挫折してしまったり、そんな経験はないでしょうか。そのような場合、なぜうまくいかなかったのか原因を深く考えることはあまりなく、たいていの場合、自分には向いていないとあきらめてしまうことが多いように思います。

物事を効率よく上達している人には共通していることがあるそうです。その一つが記憶する能力に関するものです。何かすでに上達している人はすでに知識量が多いということは想像に難くないですが、それ以外にも新しいものを覚える能力や記憶に関する認知反応に優れている、またそのメカニズムを理解し応用していることが多いのです。

知識は単語や歴史の年号など私たちが日常的に「知識」と理解している「宣言型知識」と味覚や香り、またゴルフのスイングなど言語だけでは表すことができない「手続き型知識」の2つがあります。この知識を効果的に記憶処理していく必要があります。人間の記憶はまず見たり聞いたりするとその記憶を短時間のみ「アイコニックメモリ」ととどめることができます。このアイコニックメモリは持続時間が短く、さらには次々に新しい情報が入ってくるので、

記憶内容はすぐになくなってしまいます。この記憶をとどめておくためにはワーキングメモリに移行させる必要があります。頭の中でその記憶を繰り返す「リハーサル」を行い、長期記憶として脳に残るものとなります。

上達するという現象は1) 宣言型知識と手続き型知識の長期記憶を豊富に効率よく形成すること。2) 長期記憶に貯蔵された知識が効率よく検索できる状態に形成すること。3) 長期記憶から検索された知識が、ワーキングメモリに出力されても、ワーキングメモリに余裕のある状態を維持できること。と考えられています。(岡本 2002,66)

効果的に上達しない場合、授業やセミナーなどから得た新しい知識はアイコニックメモリに一時的に入り理解したように思いますが、実際はその後の処理がうまく行かず、知識として定着していない、スキルアップにつながらないということになります。まずは知識の分別を行い、アイコニックメモリに入れた知識を反復し意識的に長期記憶として定着させることが効果的に上達していくカギとなるのです。

参考：『上達の法則』岡本浩一（2002）／PHP 研究所

<学び★サブリ>はまなびコモンズ掲示板でも読むことができます。

大学教育学会 第43回大会 参加報告

学習アドバイザー 宮原 千咲

2021年6月5日(土)、6日(日)2日間にわたって、大学教育学会第43回大会が開催されました。今回は「コロナ時代における大学教育の挑戦」という統一テーマの下、昨年度に引き続き、オンラインで開催となりました。

基調講演では、「コロナ後の教育へオックスフォードからの提唱」をテーマに、オックスフォード大学の荻谷剛彦氏の講演がありました。コロナ禍のように、何が正しいのか誰にも判断できない状況下にあってこそ浮き彫りとなる高等教育が果たすべき役割について述べられました。また、先が見えない時代に求められる力を養うトレーニングとして、知の生産を追体験するように読む・書くことが必要であり、大学が行うべきであるとのことでした。荻谷氏の知への謙虚な姿勢から学ぶことが多く、大学教育の本質とは何かを考えさせられる講演でした。

シンポジウムでは、「コロナ時代の大学教育の挑戦～大

学教育と学生生活の両面から～」というテーマで、3大学から報告がありました。東北大学の山口昌弘氏からは大学執行部の教員の立場、関西大学の土橋良一氏からは執行部の職員の立場、川瀬友太氏からは実務的な立場、千葉工業大学の田隈広紀氏からは学部教員の立場から各大学のコロナ禍の取り組みについてのお話でした。学生支援、授業支援にフォーカスしたコロナ禍の対応、各大学の取り組みが共有されました。トップダウンであれボトムアップであれ、スピード感を持って進めるには、職員と教員、執行部といわゆる現場が協力する重要性を再確認しました。

さらに、ラウンドテーブルや自由研究発表を通し、コロナ禍においても、学生の学びのために行う様々な取り組みを知ることができました。

「コロナ禍で、対面ができないから非対面で行った」で終わらせるのではなく、まずは対面では何が実現できるのかを分析し、学生の学びを加速させていくには、今後どうすればいいのかを形式を含め、検討すべきです。学生の学びを止めないにとどまらず、どう加速させていくのかを考えていくきっかけとしたいと思います。

